

2023年5月21日 説教「失望しないで祈る」

ルカの福音書 18章 1～8節

今朝も「自分の目を正しく数える」（詩篇 90:12）に関連して、福音書から学んでいきます。

1. 祈りの教え（1～3節）

①失望せずに（1）「**いつも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。**」

主イエスが祈りの勧めをされています。それも「いつも祈るべき」と教えられます。「絶えず祈りなさい」（1テサロニケ5:17）にも共鳴します。失望しやすい者たちが、失望せずに祈るべきであることを教えようとされています。そのために、主イエスは一つのたとえ話をされました。

②裁判官（2）「**ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。**」

主イエスのたとえ話です。ここに裁判官が出てきます。裁判はよく町の入口広場で行われました。今、ここに出てくる裁判官は、相当の自信家でした。なにしろ、神を神とも思わないという不信仰な人。また、人を人とも思わない冷酷さを持った人だということです。

③やもめ（3）「**その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』**と言っていた。」

一方、その町に一人のやもめがいました。どのような経緯をたどったかは、わかりませんが、夫を亡くして歩んでいました。その女性が、裁判官のところに来て訴えたのです。「私の相手を裁いてください」。これも相手とどのようなトラブルがあったのかはわかりません。とにかく、相手を裁いて、弱い私を守ってください、と訴えたのです。

2. 裁判官のなしたこと（4～7）

①取り合わない（4）「**彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに、『私は神を恐れず、人を人とも思わないが、』**

裁判官は非情な人ですから、やもめが泣きついて来ても、しばらくは取り合わないでいました。ところが、次第に心の中で思いめぐらすようになりました。「私は神を恐れず、人を人とも思わないが」とありますが、2節に彼の紹介と同じ内容ですが、それは、彼自身が自覚しているところでありました。

②裁判をしてやろう（5）「**『どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。』**と言った。」

やもめの訴えは、裁判官にうるさくてしょうがなくなりました。そこで、裁判官は、裁判をやることにしたのです。

③うるさくて（6～7）「**でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。**」そうでもしないと、これから後も、ひっきりなしにやって来て訴えかけることが予想され、うるさくて煩わしい。それならば、裁判をやってしまった方が、早く解決がつくではないかと思ったのです。



3. 夜昼神を求める選民 (8~10 節)

①不正な裁判官のことを (8)「主は言われた。『不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。』

主イエスは、不正な裁判官の言っていることを聞きなさい、と言われるのですが、何を聞くのでしょうか。彼は、やもめがひっきりなしにやってきてうさく、これからもそうしうだから、裁判をしてやろうとしたことです。まさか、うまい話があれば平気で公儀を曲げ、コネや賄賂で判決を決めるような不正なこともする裁判官がそんな判断をするとは誰も思わなかったかもしれません。やもめはただ必死に求めていたのです。

②夜昼神を呼び求め (9)「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。」

このたとえ話をういながら、イエスは重要なメッセージをお伝えになります。つまり、あの無慈悲な裁判官であっても、執拗に求めたやもめに裁判の道を開くことにしました。それならば、慈愛の神は熱心に求める選民の祈りを聞いてくださらないことはないと言われたのです。選民という表現には、救われることが神の恵みであることを示しています。クリスチャンと言い換えても良いでしょう。神は、いつまでもクリスチャンの願いを放っておかれることはないのです。

③正しいさばき (10)「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らの為に正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

神は、クリスチャンの真実で熱心な祈りを無視なさらず、その祈りに応えてくださいます。これで、結論は結ばれたなと思いきや、ここにはイエスによって、もう一つの問題提起がなされています。つまり、人の子(イエス・キリスト)が再臨された時に、信仰者たちは、様々な患難や試練のなかで、信仰を維持し、主を求める心が見られるだろうか、といういざさか厳しい戒めの課題を出されています。

《結論》

今朝も三つのポイントで結論をいただいきたいと思います。

第一に「失望」についてです。失望については余人が関わる事ができないほどに深刻な場合があります。とはいえ、そういう失望を、主は例外にしているわけではありません。逆に、外から見ればそれほど大きな問題ではないと思われることも、当人にとっては重大なことであり、失望している場合もあります。

大分前の Hiba 支援会ニュースに、ムラサキスポーツの会長である金奉任氏がこんなことを記していました。「最近、私は大変な問題を抱えることになりました。具体的なことは申し上げられませんが、自分でもどうすれば良いかわかりませんでした。なぜ? どうして? 押し寄せる悩みと不安と恐れに対してそう

することもできませんでした。いつものように祈りました。しかし、心に平安がありません。金兄はローマ 11:36、マタイ 10:29 を通して、すべては神から出て、神によって保たれ、神に向かっている、ということの本気で考えた時に、心に光が射しこんで来た」と証ししています。失望はどんな立場の人にもあるのです。

失望しないで祈れというおことばの橋渡しになることとして、詩篇 42:5 があります。詩人は自分に向かって「おまえはなぜ絶望しているのか」と問いかけながら、「神を待ち望め」と導かれています。

主は失望せずに祈るべきことをたとえ話をもって教えられました。

そこで第二は「祈り」です。祈りには賛美、感謝、告白、執り成し嘆きなどがありますが、ここの祈りは願いでありましょう。ここで主は不正な裁判官とやもめのたとえを用いて教えて下さっています。女の執拗なる訴えに対して、裁判官が裁判を行うようになるという話です。11 章にも、真夜中に友人の家を訪ねてパンを貸してくれと願い、嫌がる友人の心を開かせたというのも同じ主旨です。失望をしやすい私たちに「求める」「たたく」ことを勧めて下さっています。一方で、主はくどくどと同じ言葉で祈ることを戒めています(マタイ 6:8)。ということからすれば、教えの大事なことは、内なる求めの真実さとか、真剣さということになるのでありましょう。実際のところ、私は現在筋肉が減少して歩いたり、立ち上がったたりすることが、ままなりません。普通に歩けるようになるのだろうか、立ち上がることができるのだろうか、普通に階段を上がることのできるのだろうかなど、心配し、時には失望することがあります。しかし、その時こそ、祈りへと進むべきであることは教えの通りです。

第三に、主はこの話のくだりのなかで、こんなことを言われました。「しかし、人の子が来た時、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」つまり、求めの思いがいかにか熱心であり、道が開かれ、喜ばされたとしても、その熱心さが一時的なものあれば、それは主の望んでおられることではありません。主が再臨される時に信仰が見られるかということの意味は、どんな時にも信仰によって歩んでいるかということが問われているのです。それは、今回の「自分の日を正しく数えることを教えてください」というテーマともつながっています。大切なことは、日々に霊的な恵みをいただくことを優先していくでありました。その信仰にもう一度立たせていただきたいのです。

イザヤ書 26 章 8 節にこうあります。「主よ。まことにあなたのさばきの道で、私たちはあなたを待ち望み、私の魂は、あなたの御名を、あなたの呼び名を慕います。私の魂は、夜あなたを慕います。まことに、私の内なる霊はあなたを切に求めます。」

主を心から待ち望みつつ、主を慕い、かつ切に求める信仰者の姿がここにあります。私どもも、失望していることをゆだね、主の導きと助けを待ち望みつつ、切に求めていきたいのです。